（郵便振替、小樽1-570、加入者、あごら札幌）

あごら さっぽろ

NO.96

あごら札幌連絡先
細田英理子
Tel. 644・2927

通信担当
細田英理子

1987. 1.31 発行

今月のなかみ

例会報告 ----- 1
あごらってナーニ? ------ 2・3・4・5
均等法をめぐって思うこと ---- 6
私が読んだ本 ---- 7
情報 ----- 8

1月例会報告

出席者、11名。あごら札幌を、どうするか、については、一人でも"あごらを続ける"という人がいる限り存続するので、通信のもち方について、ということから話し合いが始まりました。

通信に載せるものとしては、

- あごら札幌としての活動報告（メインは、例会報告）
- 連絡、情報の伝達
- 随筆、エッセー など

ページ数は通常8ページとするが、その時々で変動があることも予想され、8ページにはこだわらない。会員が通信に載せたいと思って書いたものは原則として載せる。ただし責任執筆者本人が負う。内容に疑問、異議等のある人は、直接、その人に伝える。何らかの理由で直接話せない人は、紙上討論、その他の方法を考える。

遠方で例会に参加できない等の理由で通信購読している方には、会を支えるということで、なるべく、あごら札幌の、又、さらには あごらの正会員になってもらうよう働きかける。又、年一回程度（多いほど歓迎）通信への執筆を依頼する。

他に事務的なこととして、通信には毎回連絡先のTel番号と共に郵便振込の番号を書き添える。

又、今年の仕事を目選他選で次のように分担しました。

		Tel.
連絡先、	細田 英理子	(644・2927)
通信係	谷 百合子	(664・0632)
会計	松平 明美	(782・3338)
名簿係	盛生 高子	(841・9570)
資料整理	北谷 澄子	(643・6934)
他誌通信連絡	高橋 芳恵	(563・6917)
本会計	細田 英理子	(644・2927)

以上。

月末に通信作成会議をもち（その月の通信担当者は必死にメンバーを集めよう！）その日、都合のつく人はできるだけ集まって、ワイワイ・ガヤガヤ楽しみながら作りましょう、ということになりました。新聞社へ出す例会案内等の作業も、その時、することになりました。

今年1年の活動（例会テーマ等）に関しては2月例会に持ち越し、10:30まで延長されて例会は終わりました。

なお、次ページからは、参加者ひとりひとりの"あごらってナーニ?"です。

（文責、タカハシ ヨシエ）

あごらってナーニ？

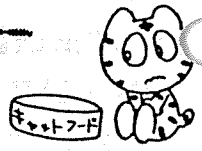
「私はリブなんだ」と声を大にして言えるところ。

タカハシ ヨシエ

例会の場でずばり、盛生さんがおっしゃっていたように、（私の言葉で置き換えると）「リブ運動のひとつの拠点」でありたい。リブ運動の拠点はいくつあってもいい。沢山の拠点があって、いざ、というとき、互いの連けいプレーで大きな力となれたら素晴しい。

半身でかかわる、とかもう辞めたい、とかずい分と無責任な言い方で諸姉を怒らせてしまったが、未だ自ら行動を起こせないでいる。他のグループの集まりに参加していつも思うことは「リブだ」と胸を張って居られる場はあごらしかないということ。…それなりに、魅力的なメンバーが魅力的な活動をしているのだけれど…。

あごら…囲いのない広場。基本的には来るもの拒まず、去るもの追わず。自分があごらにかかわり始めた時のことを思うと、存続してほしいと思う。だから万一、一人になっても、例会の日・時・場所だけは設定したい。しかし、「私が」あごらをやらねばならぬ、という気負いは全くない。もちろん、メンバーが増えて、分科会のような形で、どんどん広がっていったら素晴しいし、そうなるように、頑張りたい。頑張りましょう。



私にとって"あごら"は単純明快、リブの拠点です。
そして、今こそリブが最も必要な時です。
男達は屠殺場に向う羊のように戦(おのの)きながらも流されている。妻子を養わなければならないという理屈をつけて。
冗談じゃない。戦争に首をさしのべてまで養ってほしくない。
いざとなったら、みんな別れようじゃないの。生活保護を受ける方がよっぽど立派な生き方だ。
開き直った女の強さしか、男達を救う道はないように思う。　盛生高子

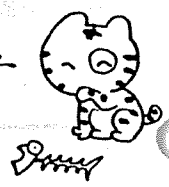
私にとってあごら通信は、お腹の中に溜まったものを吐き出すことのできる貴重なスペースです。
書くことによって整理されていくということがあり、自分にとっての真実が白日の下にさらけ出されます。
それは私にとって、二度と読み返したくないと思われるシロモノではありますが、一人の人間にとっての真実は、語られるに値するものだと勝手に考えています。　奥村さと子

あごら札幌は、自分の問題として、つまり自分自身が解決をのぞみ、自分自身が解決のために努力するという、そういう問題として、女性問題、性差別の問題を考えるところであってほしい。どんな理論も学習も、解決のために行動するという前提ではじめて成りたつものだと思う。
自分が生活の場で抱えている問題解決のために、「今度は――してみよう」という行動のヒントが得られる場。直接その問題を話しあっていなくても、毎回の例会がそんな場になればよいな、と考え、今年一年参加していくつもりです。
後藤晶子

札幌あごらとかかわりを持って8年。女の問題に関する情報を知る事が嬉しい。地域では話せない本音でも、あごらでは語り合える。なによりも個々人の魅力的な生き方にふれる事の出来て得たものは大きかったと実感しています。一般論としてリーダを問われても、私自身はどこから手をつけていいのか、どうせ崩していけばいいのか、正直いってわかりません。言動は結局、背のびせず、身のたけでやるしかないと思う様になりました。
これからのあごらは、私にとっていい生き方をしていく為の発行機にたとえると、方向舵の役割をはたしてほしいと願っています。
札幌にあごらなる存在は必要だし、これからもステキな人達との新しい出会いに期待をしているのデス。　北谷澄子

私は"あごら札幌"を女が自分を見つめたり、自分を伸ばしたり自分を育てたり、自分の気持ちを解放したり、できる広場にしたいと思います。最低限それができる会であれば、色々な人との出会いや、生きる力が期待できると思います。
その上で、個人々々の学びたい、是非伝えたいという熱意によっての学習や通信ができればよいです。
ただ学習したり、情報をキャッチし伝えるだけでは、お互い育て合うことにならず、会がうまくいかなくなることは、この間の様々なでき事ではっきりしたと思いますが、このことについては、また話し合いましょう

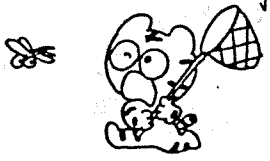
松平



「よく聞ける人に----」

自分では、よく見えているつもり、よく聞いているつもり、よく考えているつもり…の事が、実際はピントがずれていたり、思い込みでしかなかったりする事がある。そんな時、気付かせてくれる場が欲しいと思っていた。
「あごら」は、私にとって単なる情報源、と言うよりも「学ぶ場」の意味合いが強い。相手や事実をよく見、よく聞き、そしてよりよく考えて行くための研鑽の場であってほしいと思う。
今の世の中、少しでもまっとうに生きようと考えた時、どうしても女性差別の問題に突き当たる。女性差別の歴史は気が遠くなる程、大昔からある。とても一朝一夕で解決する問題ではない。日陰の部分であった差別の事実を、陽のあたる場にさらすには、取り出す人間の問題意識や、生き方が問われると思う。
「あごら」を真の意味での「広場」たらしめるには、お互いが、相手の話をよく聞くことの出来る自主的な人間になって行くことが大切ではないだろうか。「女」の問題を語る時、この事を抜きに考えることは出来ないと思う。

谷 玲子



私にとってあごらは

① 情報の広場です。たとえばいろいろなグループに属する人からの情報やある事柄についてのみんなの意見そのものが、貴重な情報だと思います。ですから、フェミニズムという点で一致できるなら、できるだけ多様な立場の人が来てくれた方がよいと思います。お互いの違いを認めつつ、政治的な事柄についてもいろいろな情報を交換できればいいと思います。

② エネルギーを充塡する場です。例会に来ると、みんなに会えてホッとします。ざっくばらんな話ができて、エネルギーを充塡することができます。私のフェミニズムの戦場はやはり第一に職場です。そこでよりよく周囲の人を変えるというたたかいをしていくにはどうしたらいいか、くじけそうになる心をたてなおし、実際的なヒントを得る場です。

小松ともみ

フェミニズムの問題を考えた時、あるフェミニズムの集会での副題として「行くも地獄、のこるも地獄の中で」というコピーが使われたことを思い出した。

職場に出ても、厳しい労働条件の中で女達は男なみエリート女性と、人間なみにもあつかわれない女性とに別り5れ、家庭に入っても他者によっての私として生きる人生が待っているのである。

このフェミニズムが非常にむずかしい時期に「あごら」をどのようにしたいか、私は1つの疑問を持った人に10も100も疑問を持ってもらい、そして、なっとくするまで考え、行動する場にしたいと思う。

最後に、女にとって「あごら」が住みはい場所である限り、女にとって「あごら」の外は住みにくいのではないだろうか。

（伊藤初江）

あごら札幌は女性の問題（ひいては男の問題）を考える場、リブの場（"男は外、女は内"という性別役割分業否定）だと思っています。

私はあごらに関わることでずい分変ったと思います。素敵な女の生き方にじかに触れ、いろいろな情報も得ました。その中で、もやもやしていて自分の中で整理できなかったものが少しづつみえてきたり……。あごらはいろいろなことを考えさせてくれる"きっかけ"の場でした。こういう場は必要だと思います。何とか続けていけたらと思います。

細田英理子

※ とりあえず参加者の"あごらってナニ"を載せました。まだ書いてない人は次号に載せますので原稿を！"自分にとってあごら札幌とはどういう場なのか、どうありたいと思っているのか"を。通信購読の方も感想なり何かあれば一言を！

新聞労働者Uさんへ

均等法をめぐって思うこと

実のある平等法を望んだのに、その名も機会均等法などと、ちょっとまやかしの法律になって了ったけれど、建前でも平等を目指すと言った以上正反対のあつかいも出来ず、鉄連裁判に見るようにソコソコの効果は上がるもの。絶望しないで大事に大事によりよい法律に育ててゆきましょう。

「管理職の範囲」や、「その者の任意で制限を越えた勤務をさせられる」などは、全くずるいとしか言いようがありませんね。

経営者側の悪賢こさにもまして残念なのは男性組合員の認識の低さです。私の知人にK氏という身障の方が居られるのですが、暫く前まで、北海道新聞の男性記者が時々尋ねては、たくましく生きる身障者の姿をよくP.Rして呉れていました。聞けば或る期間ノイローゼのようになってポストを外されていた方だということでした。

或る日、K氏が「あの奥さんのやり方では、夫がノイローゼになるのも当りまえだ」と言うので聞いてみると、前日の或る会合で同席した時、「子供の世話をあれこれやらせる」「もっと現実を考へなければ」と言うではありませんか。私はビックリして言いました。「一きょにとは言わないけれど現実だけを合せていては、何事も変えられない。そうゆう考へ方は差別につながるものでしょう」と。するとK氏「新聞記者の仕事は夜うち朝がけで普通と違うから」　ああ、この性別役割意識の根強さよ。

その時私は、日常生活を手で知らない人に人間のことが本当に解るのだろうかと考へました。

大労組の委員長が「職場を確保する為なら兵器も作る」と言い、防衛費は1%を突破し、スパイ防止法もチラついているこんな情勢の時こそ、新聞は「毒舌の帝王」であってほしいと願うのに、作っている人達が企業論理の能率至上主義になって了ったら、どうゆう事になるのか、と、少しものを考へる読者なら心配するのがあたりまえなのに、それを指摘されて「挑戦」と受取るような人が部長では行先の暗さに怯えてしまいそうです。

男性の意識のひどい中で働き続けるのはさぞつらいと思いますが、どうか、職場に喰いついていて下さい。これ以上事態を悪くしないために。

改悪を呑まされた朝日新聞の女性達に、どのような変化が出ているのか、知るすべがあったら教へて下さい。

盛生高子

『男達の意識革命』

下村満子著　朝日文庫

この本は、アメリカの女性解放運動が一般社会に浸透していって、特に男性をどう変えたか、彼らにどんな影響を及ぼしたかを述べたものである。週刊朝日に、かなり以前連載されていた「アメリカの男たちは、いま」をまとめ、改題したもの。

この本は現状報告であって、しかも一貫して男の立場から書かれている。で、フェミニズムに対する偏見、誤解、中傷もあります。それにも関らず、皆さんにも読んでいただきたいのは、彼らの「男性解放運動」の問いが、やはり性差別の撤廃を目指したものであるからです。フェミニズムの大きな主張が「女にも仕事を」であるように、彼らの主張は「男にも家庭を」です。どちらも社会が自分たちから奪ってしまった選択権を主張するのです。彼女たちと彼らは「男にも女にも家庭と仕事とどちらの選択権も与えよ」というのです。

常々私は、性差別は女性だけでなく、男性も抑圧している、と考えていたのですが、日本の男たちは一向にそんなことを考えていないようで、遠くアメリカからその証拠が届いたのは、喜ぶべきか、悲しむべきか。性差別は男を家庭から、女を仕事から疎外します。選択権を奪われるという点においてはかわりません。ただ、女が奪われる労働という選択権は、自分の生存の基本的保障であり、また経済至上の社会では社会的に無力な状態にならずにすむ一つの歯止めとなります。当然、揺してるのはこっち、と疎外に睨めるのは女性が早いのがそれは遅速の問題であって、男も女も同じ一つのたたかいをたたかうことができるのだと思います。

この本には、男がいかに抑圧され、どのようにそれらに対してたたかっているかを　離婚、子供の養育権、ゲイ、新しい問題として女性上司の性的圧迫などの題材で描きだしています。

この本にかかれたことをどう位置づけるか、自分の中の男性、フェミニズムが何であるかを具体的に考えてみては？

（後藤晶子）

情報

☆一万人フェスティバル連続イヴェント 第2弾
講演会「札幌に原発を!!」

―そんなに安全なら都会につくったっていいじゃない?―

・話す人　広瀬隆（"東京に原発を!"でおなじみ）

¥300

・時と場所　2/25(日)　6:00～.　市民会館

2/26(木)　10:00～12:00　婦人文化センター（大通西19）

詳細は704-5447へ

☆"喫煙と健康女性会議"入会の呼びかけ

性教育の講演をしてくれた北沢杏子さんから是非会員になってほしいと呼びかけがありました。最近間接喫煙の害がいわれてきています。"自分と他人の健康を守る、きれいな環境をまもる"という観点から是非入会を!

北沢さんをはじめ仲野陽子、半田たつ子、久野綾子氏など多数の方が呼びかけ人になっています。入会申込書や詳しいチラシがありますので細田か高橋まで連絡を。

(644-2927)　(563-6917)

・入会金　500円　郵便振替　東京6-127960

2月例会案内

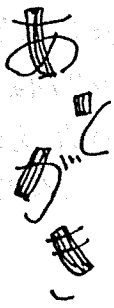
「あごらってナーニ?」第2弾　1月例会の続き

（例会のあり方 / 今年の活動 について）

とき：2月13日(金)　6:30～

ところ：喫茶ミドリ

南4西1　tel 231-6427



ここ半年くらい通信は原則として原稿を書く人が通信にそのまま載せられるように清書して出すことになっているので（通信作成会議に集まってから書いている人も多いですが）通信担当者はとても楽!担当者がやる部分が少なかったので、のんびりと楽しみながら見出しのレイアウトやカット選びをしました。原稿を書くのは苦手だけどこういうことは好きなんだと改めて思いました!（えりこ）